

国立国会図書館



関西館特集

開館10周年を迎えて

関西発・知られざる図書館のあゆみ

関西館開館10周年記念展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」

2012.10

No. 619

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の閉室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

- 02 原始仏教の実践哲学 和辻哲郎の博士論文（関西館のコレクション紹介）
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 特集 国立国会図書館関西館
- 05 国立国会図書館関西館 開館10周年を迎えて
- 16 国立国会図書館関西館開館10周年記念展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」
関西発・知られざる図書館のあゆみ
- 24 国立国会図書館の研修で、あなたの技術と知識を磨いてみませんか？

15 館内スコープ

大きな図書館のなかの小さな図書館

28 本屋にない本

○「多摩・商店ことはじめ 商店の歴史と多摩ニュータウン パルテノン多摩歴史ミュージアム特別展」

29 NDL NEWS

- 東日本大震災により被災した古文書の修復を開始
- 韓国国立中央図書館との第15回業務交流
- おもな人事

32 お知らせ

- 資料のデジタル化に伴い原資料の利用を停止します
- 第14回図書館総合展に参加します
- 平成24年度企画展示「日本と西洋—イメージの交差」
- 関西館小展示（第12回）「時空をかける三国志」
- 国際子ども図書館講演会「中国の子どもの読書—作家・彭懿氏が語る現在」
- 東京本館「利用ガイダンス」
- 平成24年度障害者サービス担当職員向け講座
- 総合調査報告書『技術と文化による日本の再生』を刊行しました
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

国立国会図書館の蔵書から

原始仏教の実践哲学

和辻哲郎の博士論文（関西館のコレクション紹介）

長尾 宗典

和辻哲郎(1889～1960)(写真1)は、日本を代表する哲学者・倫理学者の一人であり、『古寺巡礼』や『風土』などの著作によって知られている。昭和2(1927)年に刊行された『原始仏教の実践哲学』(写真2)は、仏教資料の扱い方、原始仏教の立場、原始仏教の縁起説や四諦八正道^{したいはっしょうどう}などの根本教義について論じたもので、とくに原始仏教の「無我」の立場が強調されている。「我」を立てようとすれば、必ず他の「我」と衝突する。「我」は煩惱の根である。これに対し、「我」を捨てる「無我」の立場こそ、原始仏教の革新性だったと和辻は論じている。この視点は、彼が後年、西洋の個人主義を批判し、「間柄」という日本独自の倫理学を打ち立てていく端緒といえ、和辻の精神形成にとって「まさに本質的な意義をもったもの¹」という評価もある。和辻は、同書をもって、昭和7(1932)年7月12日付で、京都帝国大学から文学博士号を授与された。関西館では、国内博士論文の一つとして、本資料を所蔵している(写真3)。

本資料の特徴は、筆跡から判断して和辻自身のものと思われる書き込みが随所に見られることである(写真4)。和辻の蔵書への書き込みは有名だが²、彼は自著に対しても、何度も繰り返し推敲し、書き直す人物であった。多くは用語の訂正であるが、哲学者の思索となれば、語句一つの変更も重要な意味を持つ。また、書き込みのなかには、和辻の学位授与と同じ昭和7(1932)年に出された『原始仏教の実践哲学』改訂再版に含まれていない記述もある³。

関西館所蔵の博士論文は、大正12(1923)年の関東大震災後から現在までの、約55万人分に及んでいる。

戦前期の博士の学位は、大学が文部大臣の認可を受けて

授与するものと定められ、大学から文部大臣に提出される申請書類には論文本体を添付することになっていた。提出された博士論文は文部省内に保管されていたが、これらの論文は大正12(1923)年の関東大震災で焼失してしまう。国立国会図書館の前身の一つである帝国図書館は震災の被害が軽微であったため、万一の場合の危険回避の意味から、文部省に交渉して移管の了承を取り付け、以後、博士論文は帝国図書館に収蔵されることになった⁴。戦後、国立国会図書館が設立されてからも文部省からの移管は続いたが、文部省への働きかけの結果、昭和50(1975)年4月以降は、各大学から直接国立国会図書館に寄贈されることとなった。平成14(2002)年以後は、関西館において、引き続き収集と整理、保管を行っている⁵。

一般に博士論文は、新規性を競う学術分野での利用が多いが、約90年にわたる国内の学術成果のコレクションとして考えれば、歴史資料としての活用法も考えられるだろう。関西館が所蔵する博士論文が、広く利用されることを願ってやまない。

なお、本資料は、関西館開館10周年記念展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」(平成24年10月1日～31日)にも出品している。展示会の詳細は本誌16ページ以降をご覧ください。

(ながお むねのり 関西館収集整理課)

- 1 中村元「解説」『和辻哲郎全集』第5巻 岩波書店 1962 p.581
- 2 牧野英二著『和辻哲郎の書き込みを見よ! 和辻倫理学の今日的意義』法政大学出版局 2010
- 3 写真4参照。一番右のp.301の書き込みが改訂再版に反映されていないことが分かる。
- 4 岡田温「旧上野図書館の収集方針とその蔵書」『図書館研究シリーズ』(5) 1961.12 p.204
- 5 「国内博士論文のご案内」『国立国会図書館月報』(574) 2009.1 pp.34-35.



写真1
和辻哲郎肖像
(1921年頃)
『和辻哲郎全集』
第17巻
岩波書店 1963



写真2
表紙と標題紙



写真3
博士論文の
目録カード
(関西館総合
閲覧室内)

『原始佛敎の實踐哲學』 和辻哲郎著

授与年月日 昭和7(1932)年7月12日

<請求記号 UT51-文12-7> ※関西館所蔵

行くものに対して過ぎ行くことを示すものであって、こゝから法の過ぎ行くかざるの法としての意味が生ずる。さうして一切の過ぎ行くものはかゝる過ぎ行くかざるの法を足場とし支へて有るが故に、持はぬも執持となり、従つて「さまじ」かたの意味を生ずるのである。例へば過ぎ行く生活は於て習慣は過ぎ行くかざるの法であり、過ぎ行く生活のみさき「かた」であるが故に、デヤマは古くは「習慣」設定せられた秩序などを意味した。かゝる如きかたの意味が法の本来の意

然るば存在するものの法としての色受想行識五法と無常苦無我の法とは如何に關係するか。後者は前述の如く存在がいかなる場合にも時間的變易であることとを明示して存在者と法との區別を確立した。前者はかゝる存在者の存在の法を立てるのである。こゝに我々は既に二層の法を、即ち存在者と法とを區別す

以上の説は以上述べた如くは緣起關係が存在するものの間の因果關係ではなく、存在するものの法と法との間の因果關係であることを確定してよいと思ふ。この見方を以て緣起關係の二層を考へれば、そこは緣起説の意義が極めて明確なものであるとして置かれてくることに、また更にこの見方の必然性が明らかになるのである。

写真4 本資料の和辻自身のものと見られる書き込み箇所と改訂再版(昭和7年刊)の同じ箇所との比較。
左から本資料173ページ、改訂再版同ページ、本資料177ページ、改訂再版同ページ、本資料301ページ、改訂再版同ページ。



特集 国立国会図書館関西館

今月、京都府相楽郡精華町の地に国立国会図書館関西館が誕生して 10 周年を迎えました。
これを記念し、本誌では関西館を特集します。



国立国会図書館関西館 開館10周年を迎えて

石川 武敏

国立国会図書館関西館は平成14年10月に開館し、今年10月で10周年を迎えた。検討開始から開館に至るまでの20年を合わせると、構想から今年で30年を迎えることになる。

関西館開館後10年の区切りを機に、国立国会図書館は次のステップに踏み出す時期を迎え、館全体としてその検討に取り組んでいるところである。筆者は、開館の6年前に関西館準備室に籍を置き、開館後は関西館10年のうちの通算3年半の期間を3つの異なる立場で業務に携わった。本稿は、関西館で業務を担当した者の一人としての観点から、開館10年を経て、開館前の構想がどのように現実のものとなったのかを振り返るものである。

関西館の現在をご理解いただき、今後の展望を開くための一助となれば幸いである。

1. 開館10周年を迎えた関西館

平成14年10月5日、澄みきった秋空の下、衆・参両議院議長をはじめとする多数の来賓の参加を得て、国立国会図書館関西館開館記念式典が盛大に執り行われた。延べ床面積約59,300㎡、地上4階地下4階の堂々たる図書館の開館は、人々に図書館の新しい時代の幕開けを感じさせるものであった。

この日を迎えるまでに、どのような構想があったのか、「関西館前史」から振り返ってみたい。

関西地域に国立国会図書館の施設を建設するための検討は、昭和57年6月の国立国会図書館関西プロジェクト調査会の設置をもって嚆矢とする。同調査会により昭和62年に答申¹がなされ、国立国会図書館の機能を強化し、長期的な資料収蔵能力を確保し、また大型情報提供施設の整備を望む地域の要望にも応えるために、新施設を関西文化学術研究都市に設置するのが適当とされた。この答申を踏まえて建設を事業化するために、当館



1 <http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/198704.pdf>



平成14年10月5日国立国会図書館関西館開館記念式典の様子

年表 関西館に関連する

国立国会図書館10年の動き

平成14年10月	NDL-OPAC、アジア言語OPAC、近代デジタルライブラリーを提供開始 関西館開館
11月	「関西館開館記念シンポジウム—図書館新世紀」を2回にわたり開催
12月	
平成15年3月	「アジア情報室通報」創刊
8月	「図書館調査研究レポート」創刊
10月	メールマガジン「図書館協力ニュース」配信開始
平成17年12月	レファレンス協同データベース一般公開
平成18年7月	WARPの本格事業化
平成19年10月	デジタルアーカイブポータル (PORTA) 提供開始
平成21年度	大規模デジタル化事業実施 (～平成23年度)
平成21年6月	著作権法改正。保存のためのデジタル化が可能に (平成22年1月施行)
平成22年4月	国等公的機関のインターネット資料の収集開始
8月	「日中韓電子図書館イニシアチブ協定」締結
平成23年5月	歴史的音源の提供開始
7月	デジタル化資料の提供件数が100万点を超える
10月	東京本館に電子情報部設置
平成24年1月	図書館サービスシステムリニューアル 国立国会図書館サーチがサービス開始 アジア言語OPACをNDL-OPACに統合
4月	官報のデジタル化画像提供開始
5月	博士論文のデジタル化画像提供開始 デジタル化資料の提供件数が200万点を超える
6月	著作権法改正。デジタル化資料の公共図書館への配信が可能に (平成25年1月施行)
7月	歴史的音源の公立図書館への配信本格実施

は、新施設が担うべき機能についての検討を始めた。検討の成果は「国立国会図書館関西館（仮称）設立に関する第一次基本構想」²（昭和63年8月）を経て、「国立国会図書館関西館（仮称）設立に関する第二次基本構想」³（平成3年8月。以下「第二次構想」）に結実した。そして、平成6年5月に館内に関西館準備室を置き、ついに同年12月に国立国会図書館建築委員会が国会に対して関西館の建設を勧告⁴したことにより、関西文化学術研究都市の精華・西木津地区に、最終目標が敷地面積約82,500㎡、延べ床面積約165,000㎡規模の図書館施設（当面第1期は延べ床面積約60,000㎡）を建築する建設計画が事業化された。この勧告の基礎となった「国立国会図書館関西館（仮称）建設基本計画概要」⁵における関西館の機能は、その3年前に打ち出された「第二次構想」の内容がほぼ全て反映されたものであった。したがって、図書館機能については、「第二次構想」を設計図として、関西館は建設されたといえることができる。

その後、平成8年8月に国の内外からの応募493作品の中から建築設計競技最優秀作品を決定（陶器二三雄氏作品）、平成10年10月に着工、平成14年3月に概成・引渡し、同4月に組織として「関西館」を置き、資料の移転を開始した。そして10月に冒頭の開館記念式典挙行に至る。

開館後関西館は精力的に活動を続けた。その主な動きを年表にまとめた。これを見るだけでも、この10年で数多くの新事業、新サービスを開始したことがわかりいただけると思う。

2 http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/198808_1.pdf

3 http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/199108_2.pdf

4 http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/199412_1.pdf

5 http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/199412_3.pdf

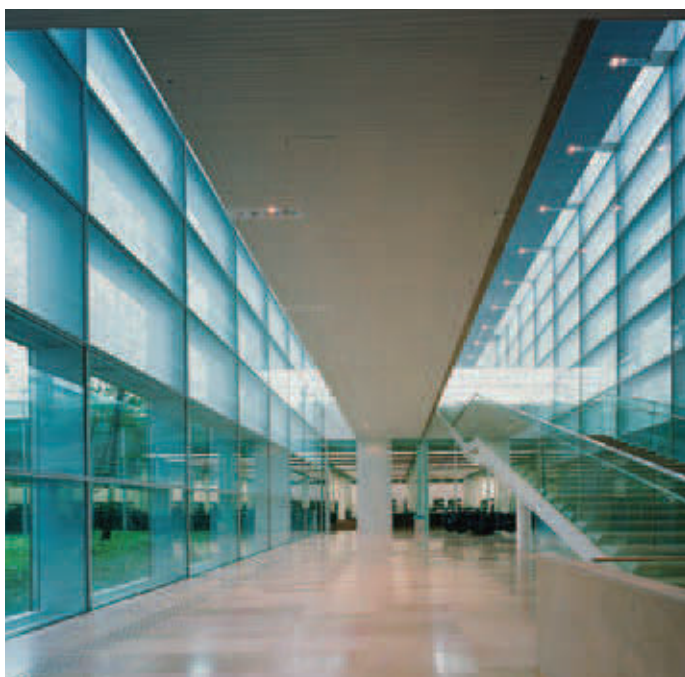
2. 「第二次構想」における

関西館の機能

関西館の基本となった「第二次構想」とは、どのような内容だったのか。単に、新たに建設する関西館のみを見据えた構想にとどまらず、関西館を建設し東京本館と一体となって運営することによって、国立国会図書館全体を来るべき21世紀という新時代にマッチした図書館にする、そのような遠大な理想のもとに構想されている点に注目したい。

まず、国立国会図書館の役割を、(A) 国会のデータベースとしての立法活動への高度な情報支援、(B) 国民全体と国際社会に開かれた国立図書館としての役割強化、(C) 我が国の情報資源の有効活用と世界における自由な情報流通への寄与、とし、これを実現するための関西館の役割として、

- (1) 文献情報の発信
- (2) 世界的なサービスの提供
- (3) 新しい図書館協力の推進



という3点が謳われている。この3つの役割遂行のために想定されるサービス・機能として、「(1) 文献情報の発信」の役割については、複写・図書館間貸出し等による文献提供、全文データベースによる電子文献の提供、ネットワークによる書誌情報・立法情報の提供等が掲げられ、「(2) 世界的なサービスの提供」については、日本情報の提供、アジア太平洋文献情報センター等が、「(3) 新しい図書館協力の推進」については、図書館情報ネットワーク、共同保存利用プロジェクト、保存修復センター、図書館情報学の研究開発支援、図書館人に対する国際的な研修・交流が掲げられている。

「第二次構想」が生まれた平成3年は、まだ社会全体にインターネットが十分に普及していない時代であった。そのような時代にあって、このように新しい機能を中心とする画期的な構想を立てたことは高く評価されるべきであろう。



3. 開館10年後の関西館の機能

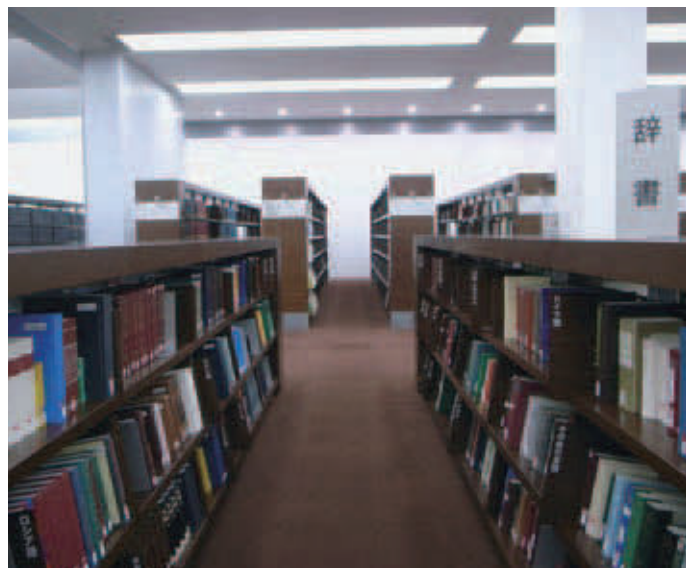
次に、「第二次構想」の3つの役割から現在の関西館（および国立国会図書館）を検証してみたい。

（1）「文献情報の発信」の観点

「第二次構想」で関西館の1つ目の役割とされた「文献情報の発信」の観点から見ると、次のような発展を遂げている。

関西館は遠隔複写および図書館間貸出しの窓口を担っている。遠隔複写においては、登録利用者は必要な文献の所蔵が東京本館、関西館、国際子ども図書館のいずれにあるのかを意識することなく、NDL-OPACによって全国、全世界からいつでもインターネットを通じて申し込むことが可能となり、10年で3倍以上に利用実績が伸びた⁶。

電子的な文献提供については、関西館に電子図書館課を置き、重点的に推進してきた。「近代デジタルライブラリー」を中心とするデジタル化資料のインターネット提供件数が開館時約3万点から約41万点に増加した(平成24年8月現在)。また、開館とほぼ同時に開始した「インターネット資



源選択的蓄積実験事業（Web Archiving Project：略称WARP）」は、平成18年7月に本格事業化され、平成21年7月国立国会図書館および著作権法の改正を経て、平成22年4月から「インターネット資料収集保存事業（Web Archiving Project）」として生まれ変わり、国等の公的機関のサイトについては発信者の許諾を得なくとも収集・保存できるようになった。その結果、現在では約7,000サイトについては定期的に収集し、約44,000件を公開、データ量は約140TBに達している。年間アクセス数は、「近代デジタルライブラリー」が約3,330万回（画像単位）、「インターネット資料収集保存事業（Web Archiving Project）」は約72万回（各ウェブサイト単位）を数える⁷。

一方、「第二次構想」の書誌情報、立法情報の提供については、館全体としてNDL-OPAC、国立国会図書館サーチ、国会関連情報等をインターネットに広く提供することで実現できている。

また、文献情報の発信を支える蔵書の構築については、遠隔利用に適した洋雑誌、和図書複本、科学技術リポート類、アジア情報の発信のための



6 「遠隔複写サービスの現在とこれから」『国立国会図書館月報』(611) 2012.2 pp.21-25

7 平成23年度基本統計による。

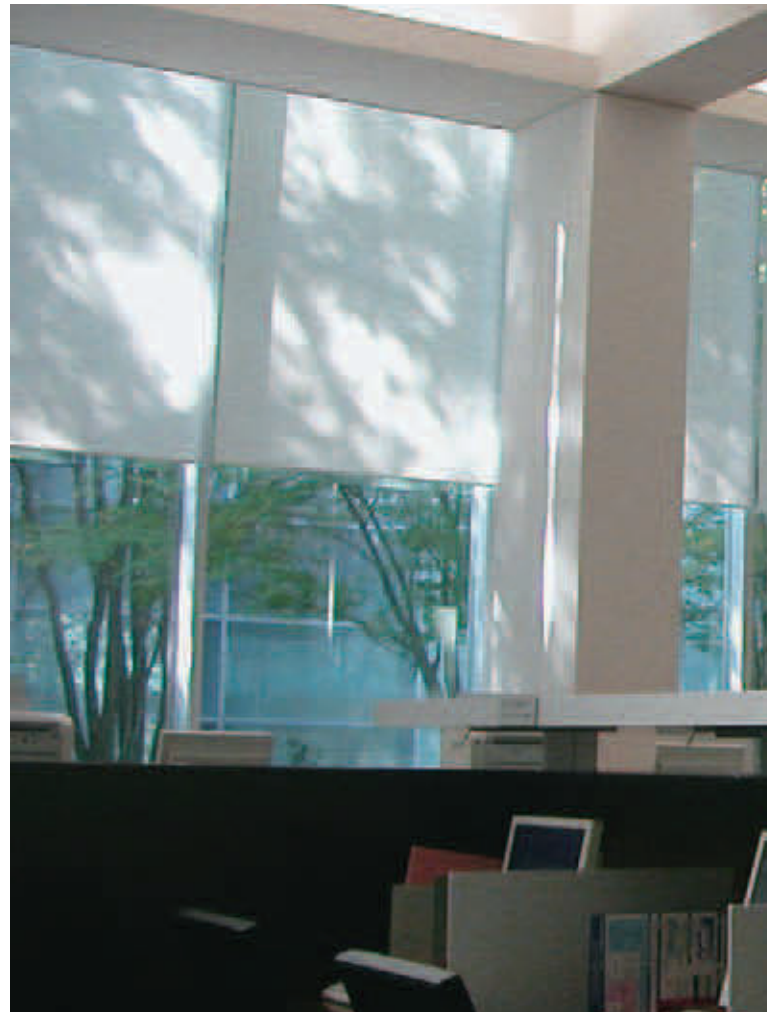
アジア関係資料を整備し、関西館の機能を支えている一方、東京本館の書庫狭隘化に対処するため平成21年度と平成23年度に合計約105万冊を東京本館から関西館に移送して東西を平準化し、国立国会図書館全体の資料収蔵能力を確保するのに貢献した。現在の関西館の蔵書は「第二次構想」における開館10年後の目標を上回る逐次刊行物約12万タイトル（約473万点）、図書約300万冊という規模を達成している⁸。

（2）「世界的なサービスの提供」の観点

関西館の2つ目の役割とされた「世界的なサービスの提供」については、どうであろうか。「第二次構想」が策定された平成3年は、わが国が経済および科学技術の分野で世界に対する影響力を大きく増大させていた時期であり、世界的に日本情報のニーズが高まっていた。そのニーズへの対応に関西館による国際的な情報の流通に求めている。

現在、英語版NDL-OPACによる複写申込みにより、海外からの日本情報の入手が当時に比して飛躍的に容易になり、その窓口に関西館が担っている。また、関西館は「近代デジタルライブラリー」「インターネット資料収集保存事業（Web Archiving Project）」などにより日本の一次情報をインターネットに発信することで日本情報の流通に貢献している。

「第二次構想」の「アジア太平洋文献情報センター」は、「国立国会図書館関西館（仮称）建設基本計画概要」において「アジア」に地域が限定されたが、機能としては同じである。アジアの国々に対し日本や欧米の文献情報を提供し、アジアの



文献情報を国内、アジア地域、さらには全世界に向けて中継・発信するための機関として構想されていた。

現在、関西館アジア情報室は、アジア言語図書約35万冊、雑誌・年鑑類約7,800種、新聞約700種のほか、日本語および欧文のアジア関係資料、中国と韓国の電子ジャーナル等豊富な情報資源を所蔵している。関西館開館後10年ではほぼ全ての言語の書誌情報についてNDL-OPACで利用可能になり、国内外からの資料利用の要求が容易になった。また、アジア関係リンク集AsiaLinks、アジア情報機関ダイレクトリーなどアジア情報の調査に役立つ情報をインターネットに公開し、世



界に情報を発信している。また、国内に対しては、図書館員向けのアジア情報研修、アジア資料を所蔵する主な機関が参加するアジア情報関係機関懇談会を開催し、国内のアジア情報流通にかかる連携協力にも努めている。

一方、電子図書館事業については、国際インターネット保存コンソーシアム（IIPC）⁹に加盟し、インターネット資料保存における国際協力を行うことで世界の情報流通に貢献している。

（3）「新しい図書館協力の推進」の観点

3つ目の役割「新しい図書館協力の推進」については、関西館において大いに花開いた分野である。

「第二次構想」には、図書館協力の内容として、①図書館に対する文献提供サービス、②全国的な図書館情報ネットワーク、③保存協力、④研究開発への支援と研修・交流プログラムの4点が構想されていた。①図書館に対する文献提供サービスについては、前述したように、関西館は遠隔複写と図書館間貸出しの窓口として機能しており、②全国的な図書館情報ネットワークについては、NDL-OPAC、総合目録ネットワークシステム（略称「ゆにかねっと」）。平成24年1月からNDLサーチに統合）、レファレンス協同データベース事業

⁸ 平成23年度末現在。

⁹ International Internet Preservation Consortium
<http://netpreserve.org/>



として実現した。さらに、一次コンテンツを公共図書館に配信するサービスを、まず歴史的音源から開始した。今後デジタル化した図書にも拡大する予定である。

③保存協力については、「第二次構想」にある「共同保存プロジェクト」「保存修復センター」の関西館への設置は実現していないものの、東京本館にIFLA/PACアジア地域センター¹⁰を置き、収集書誌部資料保存課を中心に資料保存研修のほか、東日本大震災で被災した図書館に対する資料修復の協力などを行っている。

④研究開発への支援と研修・交流プログラムについては、「第二次構想」の研究開発施設は実現しなかったものの、図書館分野の調査研究は、継続的に成果を出している。平成23年度には図書館調査研究レポートとして「東日本大震災と図書館」を刊行した。また、電子情報の長期保存など電子図書館に関する調査研究も行っている。

研修については、国内の図書館員等に対しては、講師派遣研修、集合研修、遠隔研修を行っている。海外の図書館員、情報専門家に対する研修事業も別途行っている。

以上みてきたように、「第二次構想」の考え方の大部分は、さまざまな形で実現したといえる。関西館において実現したものももちろん多いが、国立国会図書館全体の中で実現したもの、当館の業績ではないが社会にインターネットが普及したことによって解決したものもある。

4. 今後の課題

今後の課題としては次の3点が挙げられる。



平成23年度「関西館見学デー」の一コマ（親子でチャレンジ！和本づくり）

（1）知名度アップ

関西館は、国の中央図書館としての国立国会図書館の一翼を担う施設ではあるが、関西文化学術研究都市の中核施設として地元の要望にも応えるために建設された経緯がある。関西地方のより多くの方に利用していただきたい。ただ、関西館は意義のある事業を展開しながらも、東京本館に比較して今一つ知名度が上がらないという悩みがある¹¹。その原因の一つには、京都市中心部からも大阪市中心部からも電車とバスを乗り継いで1時間以上かかるアクセスの不便さがある。

もう一つには、積極的広報の少なさがある。さまざまなチャンネルを通じて、関西館は声をあげていかなければならない。子どもでも参加できる「関西館見学デー」やテーマごとに関連図書を展示する「小展示」などを行い、住民に親しみをもって

もらうほか、年数回近隣の機関に出張して当館の利用ガイダンスを行う、など地道な努力を行っている。

今年は開館10周年を記念して、展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」、記念講演会、国際シンポジウム等を行う。これを機にさらなる知名度アップを図りたい。

（2）施設の拡充

関西館の建設目的の一つは、大型収蔵施設の確保である。第1期工事で完成した収蔵能力約600

10 IFLA/PACは、国際図書館連盟資料保存コア活動（IFLA Core Activity on Preservation and Conservation）の略称で、国際図書館連盟（IFLA）が世界の図書館に関わる重要な課題として取り組んでいる6つのコア活動のひとつ。詳細は、以下のホームページ参照。
<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/iflapac.html>

11 平成24年3月に行ったインターネットモニター調査による認知度アンケート調査によると、東京本館の認知度が51.5%だったのに対し、関西館は11.1%であった。関西地区に限定した関西館の認知度も23.6%と決して高くない。

万冊を誇る関西館の書庫も10年を経て、80%以上が排架済みの状態となった。納本の窓口である東京本館の資料増加のスピードの方が速いため、平成21年度と23年度に大規模な資料移送を行った。このように東西での排架率の平準化を行い、各種の調整を実施しても、平成29年度末には東西を合わせた国立国会図書館全体の書庫は溢れてしまう。東京本館の敷地には拡張の余地はないので、関西館第2期工事による書庫の増設は、館全体としての喫緊の課題となっている。

(3) 東京本館と関西館の役割の再検討

関西館開館以来昨年まで、東京本館の電子情報企画室が電子図書館事業の企画を担当し、関西館電子図書館課が電子図書館事業の開発、運用、提供を行ってきたが、昨年10月に東京本館に電子情報部が発足したことにより、東西の役割分担が再編成された。これ以外の業務についても、10年を経て東京本館との役割分担について再構築する時期にきており、検討が始まっている。

また、昨年3月の東日本大震災において、東京本館は書庫の一部で約180万冊の図書が棚から落下し、4月まで利用できなくなるという被害を受けた。その際、関西館が東京本館をバックアップし、資料提供の面で利用者のニーズに応えた。今後も災害時のバックアップ機能はさらに重要性を増すであろう。

最適な業務分担を検討し、東京本館、関西館、国際子ども図書館の三施設それぞれの特性を生かし、今後も国立国会図書館は一体となって、サービスの改善に取り組んでいく。

5. おわりに

国立国会図書館の「組織」として関西館が置かれた当初、関西館長のもとで、関西館総務課、資料部（文献提供課、アジア情報課、収集整理課の3課）、事業部（図書館協力課、電子図書館課の2課）を置くという体制で発足した。平成19年度に関西館の部は廃止となり、現在は関西館長、次長のもとで、6課体制となった。当初、「事業部」を置いたことに象徴的に意義が表れているように関西館はさまざまな事業を行ってきた。現在、電子図書館事業と図書館協力事業の2つに関西館の事業の大きな柱にしているが、図書館サービスにおいても、開館当初から役立つコンテンツを作成しインターネットに発信し、また、外部機関との関係を積極的に構築するなど、「事業」的な側面に注力している。この側面は、関西館のみならず東京本館でも強化され、現在は、東日本大震災アーカイブ、大規模デジタル化事業、オンライン資料の収集、公共的書誌情報基盤等、国立国会図書館全体が事業を行う時代となった。

関西館は何もなかった所に一から図書館施設を作り上げた。この経験は、新しいことへのチャレンジ精神として関西館の中に息づいている。新たな課題に積極的に取り組んでいく職員の姿勢は今後も関西館の財産として大切にしていきたい。

(いしかわ たけとし 国立国会図書館関西館長)



大きな図書館のなかの小さな図書館

国立国会図書館では、昭和23（1948）年の開館当初に中国資料課を設けて以来、アジアに関する資料や情報の収集、提供と発信に力を入れてきました。現在は、関西館にあるアジア情報課がそれらの業務を担っています。

アジア情報課では、東アジア、東南アジア、南アジア、中央アジア、中東、北アフリカの計50以上におよぶ国・地域をカバーしています。課内では主に、担当する国・言語ごとに係を分けており、筆者が属するアジア第二係は中国に関するさまざまな業務を担当しています。

例えば中国語資料の収集。中国などで刊行された資料を、購入や寄贈、国際交換により収集しています。膨大な出版情報に紛れた重要な資料を見逃さないよう、普段から中国の学術動向等に目を光らせています。

収集の後は整理。タイトルや著者名などの書誌事項を中国語で入力した後、内容に基づき分類記号を付けます。地道な作業ですが多種多様な中国語資料に触れることで知識の幅や中国語の能力が向上しているという実感があります。

収集と整理で培った知識はレファレンス・サービスにつながります。文書、電話や閲覧室内「アジアカウンター」で、アジアに関するご質問に対応していますが、中国に関するものは多く、内容も「満洲の市電について知りたい」



中国語圖書の選書作業

や「中国のコンビニの売上高はどれくらいか」、「漢詩の日本語訳を探している」などさまざま。日本語資料では見つからない情報でも、中国語資料を駆使して探し出すのが腕の見せ所です。

そのほか、「AsiaLinks—アジア関係リンク集—」など、リサーチ・ナビ内「アジア諸国の情報をさがす」を通じた各種中国情報の発信、アジア情報を扱う図書館員を対象とした「アジア情報研修」の講師、当館と中国国家図書館との間で長年行われている「日中業務交流」での通訳・資料翻訳の分担も係の大事な仕事です。

アジア情報課の大きな特徴は、資料の収集から提供、レファレンス、協力業務まで、ひとつの図書館の業務を丸ごとこなしてしまうところにあります。国立国会図書館という大きな図書館のなかの小さなアジア専門図書館として、これからもサービスの充実に努めてまいります。

（アジア情報課アジア第二係 不知不足齋主人）

国立国会図書館関西館開館10周年記念展示会 「関西の図書館100年、関西館の10年」 関西発・知られざる図書館のあゆみ

10月1日から関西館で開催中の「関西の図書館100年、関西館の10年」展は、関西館所蔵の貴重なコレクションを中心に、関西館の設立構想から現在に至るまでのあゆみをご紹介します展示会です。あわせて、明治時代から現在に至るまでの、関西地域における図書館の歴史やさまざまな取組についても取り上げ、これまであまり知られてこなかった、関西という地域の中で図書館が果たしてきた役割を振り返ります。



写真1 電子展示会「写真の中の明治・大正—国立国会図書館所蔵写真帳から—関西編」より中之島公園

はじめに

みなさんは、「図書館」という場所に、どのようなイメージをお持ちでしょうか。古来、人々は知識や思想、経験を書物に書き記してきました。書物を集め、保存し、求めに応じて提供する図書館も、時代によって変化してきた長い歴史をもっています。

我が国の図書館の歴史は、奈良時代の^{ずしりょう}1
や、石上宅嗣が漢籍を集めて設けた^{いそのかみやかつぐ}芸亭^{うんてい}にまで遡るといわれていますが、社会基盤として、知識を

広めるために一般に蔵書を公開するという近代的な図書館の概念が輸入されたのは、幕末から明治時代にかけてのことだといわれています²。福沢諭吉は、慶応2（1866）年に刊行した『西洋事情』初編巻一において、「西洋諸国ノ都府ニハ文庫アリ「ビブリオテーキ」ト云フ日用ノ書籍図画等ヨリ古書珍書ニ至ルマテ万国ノ書皆備リ衆人來リテ随意ニ之ヲ読ムヘシ」³と、庶民が自由に書籍を閲覧できる西洋の図書館事情を紹介しています。

関西では、明治5（1872）年、民間の貸本業者



写真2 「木下京都大学総長の大学断片」『大阪毎日新聞』1897年8月29日 <請求記号 YB-7> 同記事は京都帝国大学の経営方針を複数項目にわたって述べたもので、写真はその一部である。

が集まって共同で貸付と閲覧を行う集書会社が設けられました。福沢の「ビブリオテーキ」の定義は、同社の設立趣意書にも引用されています。集書会社は翌年、京都府が設置した集書院の経営にあたりました。集書院は我が国で最初の公共図書館の一つとされており、後の京都府立図書館の源流になっていきます⁴。

関西の図書館100年

展示第I部では、「関西の図書館100年」と題して、今からおよそ100年前に全国的に公共図書館が設立され始める明治後期、大正初期から現在までのあゆみを振り返ります。その前提として、明治6（1873）年設立の集書院など、100年以上前のユニークな活動の紹介も盛り込みました。

前述のように、明治5（1872）年に設立された京都府の集書会社の申請を受けて、明治6（1873）

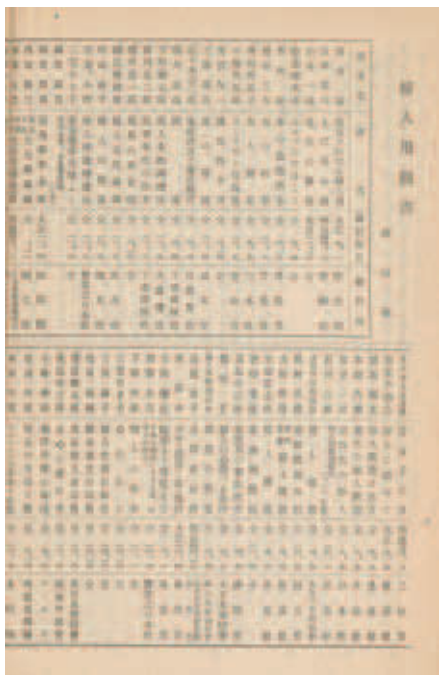
年に京都府が設置した集書院は、現在の京都府立図書館の源流であると同時に、日本の近代公共図書館の最初期の事例の一つとされています。同じ頃、国でも、文明開化の時代の要請にこたえるために図書館の設置を進めました。文部省は、明治5（1872）年に書籍館しょじやくかんを設置しました⁵。

こうした流れを受けて、各地で公立の書籍館が作られ始めますが、経営が上手くいかず、せっかく設置されても廃館に追い込まれるケースが少なくありませんでした。集書院が、明治15（1882）年に閉鎖されてしまったことに象徴されるように、明治時代を通じて、関西地域を含め、日本国内では図書館の普及はなかなか進みませんでした。その理由として、蔵書の少なさや、府县市町村の財政的基盤の弱さなどが挙げられています⁶。帝国図書館が設置された明治30（1897）年時点の統計を見ると、全国の図書館数は、公私立合わせて31館にとどまっていました⁷。

同じ年に設置された京都帝国大学では、初代総長である木下広次きのしたひろじ⁸が新聞記者の取材に応じ、設立予定の京都帝国大学附属図書館について、「設立の暁は勿論公開に為すの見込にて即ち学生の研究上に要する書籍の外は勿論唯人にも閲覧するの便利を与へん」（写真2）という構想を語っていました⁹。その理由として、「我国の如き東京に唯一あるのみ故に一事を調査せんとすれば遠方の者と雖も東京に出でざる可からず不便も亦甚し」

1 律令制の官署の一つ。書籍や経典を管理し、国史の編纂を掌った。
2 岩猿敏生著『日本図書館史概説』日外アソシエーツ 2007 <請求記号 UL55-H23>
3 引用は、福沢諭吉著『西洋事情』（再刻）初編巻之一 慶應義塾出版局 1870 32丁表による。
<http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/761234>
4 竹林熊彦著『近世日本文庫史』大雅堂 1943 pp.90-99
<http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/1122640>
多田建次著『京都集書院 福沢諭吉と京都人脈』玉川大学出版部 1998 <請求記号 UL55-G13>

5 書籍館は明治8年に東京書籍館となり、それ以降の蔵書が後の帝国図書館を経て現在の国立国会図書館に引き継がれています。
6 岩猿前掲書 pp.167-168
7 『日本帝国文部省年報』第25（明治30-31年）文部省 1898 pp.182-183 <http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/809164>
8 1851-1910。熊本出身。フランス留学後、東京帝国大学教授、第一高等学校校長、文部省専門学務局長を経て初代京都帝国大学総長に就任した。
9 廣庭基介「京大図書館の開設」丸山宏ほか編『みやこの近代』思文閣出版 2008 pp.194-195 <請求記号 GC156-J10>



左 写真5
『奈良県立奈良図書館月報』
第1巻 第2号 1923
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1489705>
(館内限定公開)
『婦人用図書』紹介の一部分



右 写真6
『^{としよかん}図書館研究』第1号 1928
<請求記号 Z21-129>

大阪で図書館用品の販売会社を営んでいた間宮不二雄^{まみやふじお}¹³は、昭和2(1927)年、近隣の図書館員を集めて青年図書館員聯盟を結成しました。間宮らは、『^{としよかん}図書館研究』(写真6)という機関誌を発行して図書館用語や用品の規格統一、目録規則、図書館管理法などについて研究活動を続けていきました。彼らが開発した『日本十進分類法』や『日本目録規則』などの図書は、その後改訂を加えられながら、現在も図書館の整理業務に必須のツールとして用いられています。

第I部ではさらに、戦争の時代、占領下、高度経済成長期を経て21世紀に至るまでの、特筆すべき関西地域における図書館活動について取り上げます。近年の重要な話題として、特にここでは

3件の事例をご紹介します。

一つ目は、平成7(1995)年1月17日早朝に発生した阪神・淡路大震災で関西の図書館が大きな被害を受けたということです。神戸大学附属図書館の「震災文庫」の取組など、震災の教訓を将来の世代に伝えるための活動は、東日本大震災を経た今、改めて重要な意味を帯びているといえます。

二つ目は、1990年代以降の電子化の潮流です。関西では、京都大学を中心に、電子図書館についての議論が深められていきました。平成12(2000)年11月、京都大学で開かれた京都電子図書館国際会議には、10ヶ国200名以上が参加し、100件余の研究発表が行われ、電子図書館の発展を目指すコミニケが採択されました。情報環境の変化

10 1871-1945。明治時代の漢詩人、野口寧齋の弟。東京帝国大学卒。在学中、高山樗牛らと雑誌『帝国文学』の創刊に関わった。大学卒業後、20代の若さで初代京都帝国大学附属図書館長に抜擢された。

11 石井敦著『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会1972<請求記号 UL244-16>
東條文規著『図書館の近代 私論・図書館はこうして大きくなった』ポット出版1999<請求記号 UL55-G17>
山梨あや著『近代日本における読書と社会教育 図書館を中心とした教育活動の成立と展開』法政大学出版局2011

<請求記号 UL745-J2>などを参照。

12 1852-1919。備前国(岡山県)出身の政治家。自由民権運動に身を投じた後、山県有朋系の官僚として内務畑を歩き、第二次桂内閣では文相として高等教育機関の拡充に努めた。

13 1890-1970。大正10(1921)年に大阪で図書館用品専門店である間宮商店を開業して図書館員と積極的な交渉を持ち、青年図書館員聯盟では書記長を務めた。戦後まで図書館界の発展に尽力した(もり・きよし「外から図書館を愛した人」石井敦編『図書館を育てた人々』日本編1 日本図書館協会1983 pp.131-138 <請求記号 UL51-17>参照)。



写真7 関西館自動書庫

と、それに伴い、大学図書館を中心に起こった電子図書館に向かう動きは、これまでの紙媒体の資料や目録を主体とした図書館業務・サービスのあり方を根本的に転換する契機となり、今や日本全体に広がりました。

三つ目は、関西の様々な図書館において、相互の連携が深められていくとともに、従来の枠組みにとらわれない様々なサービスやイベントが実施されていることです。大阪府立中之島図書館のビジネス支援や、地域コミュニティの拠点を意識した奈良県立図書情報館の各種イベントなどに見られるように、新しい時代のニーズに対応した図書館の姿が、現在進行形で模索されています。

14 関西館設立の経緯については、『国立国会図書館五十年史』本編 国立国会図書館五十年史編纂委員会編 国立国会図書館刊 1999 pp.69-84 <請求記号 UL214-G9>を参照。
また、簡単なまとめが以下のホームページに掲載されている。
国立国会図書館ホームページ>関西館>関西館開館までの経緯
<http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/history.html>
15 答申の全文は、以下のURLで全文閲覧可能。
国立国会図書館ホームページ>関西館>関西館開館までの経緯>昭和62年4月 関西プロジェクト調査会、新施設を関西文化学術研究都市に設置することを答申
<http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/198704.pdf>

関西館の10年

関西館は、図書館資料の収蔵スペースを長期的に確保し、21世紀の高度情報化社会における需要に対応するとともに、関西の大型情報提供施設としての機能を果たすことを目的に、平成14(2002)年4月に設置され、10月に開館しました。関西館では、①来館利用だけでなく、郵送による複写物の提供や図書館間貸出しなど遠隔利用を含めた資料提供、②図書館協力事業、③電子図書館事業の3つの基本機能を軸にサービスを展開しています。

関西館設立の構想の発端は、今から30年前の昭和57(1982)年6月12日に設置された国立国会図書館関西プロジェクト調査会の審議まで遡ることができます¹⁴。同調査会は、昭和62(1987)年4月に、関西文化学術研究都市である京阪奈丘陵に「第二国立国会図書館(仮称)」を設置することが適当であるとの答申を提出しました¹⁵。

この答申を受け、翌昭和63(1988)年には『国立国会図書館関西館(仮称)設立に関する第一次基本構想』が、また平成3(1991)年には、『国立国会図書館関西館(仮称)設立に関する第二次基本構想』が策定され、開館に向けた準備が進められていくことになりました¹⁶。

平成8(1996)年には、関西館建築設計競技が行われ、陶器^{とうき}二三雄^{ふみお}氏の作品が最優秀作品に選ばれました。これをもとに、関西館は平成10(1998)

16 第一次基本構想と第二次基本構想は、以下のURLで全文閲覧可能。
○第一次基本構想
国立国会図書館ホームページ>関西館>関西館開館までの経緯>昭和63年8月「国立国会図書館関西館(仮称)設立に関する第一次基本構想」策定
http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/198808_1.pdf
○第二次基本構想
国立国会図書館ホームページ>関西館>関西館開館までの経緯>平成3年8月「国立国会図書館関西館(仮称)設立に関する第二次基本構想」策定
http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/199108_2.pdf

年から工事着工、平成14(2002)年3月に引渡式が行われました。

同年4月には、国立国会図書館法が改正され、永田町の東京本館と機能分担をする「中央の図書館」の一つとして、正式に関西館が設置されました。その後、半年間かけて資料移転が行われ、10月に開館しました。

展示第Ⅱ部では、「関西館の10年」と題して、関西館の設置経緯から、開館以後取り組んでいる事業、所蔵する貴重なコレクションについてご紹介します。展示構成にあたっては、関西館の基本機能に図書館協力や電子図書館事業という間接的なサービスが含まれていることを踏まえ、閲覧室の中からだけでは窺い知る

ことができない関西館の仕事について光を当てました。

関西館の大きな事業の柱に図書館協力事業があります。これは、国立国会図書館の重要な任務の一つであり、事業として、研修交流、図書館情報学に関する調査研究、総合目録ネットワーク事業、レファレンス協同データベース事業の推進、図書館における障害者サービスへの支援を通じた各種図書館・図書館関係団体との連携・協力を行っています。



写真8 関西館設立準備のための重要文書類



関西館図書館協力課が編集・発行に関わっている図書館協力事業関係の刊行物。写真は左から、写真9『図書館協力ハンドブック 2007』国立国会図書館関西館事業部図書館協力課編 国立国会図書館刊 2007 <請求記号 UL214-H7> (最新版はwebのみ配信。http://www.ndl.go.jp/jp/library/handbook/handbook/all.pdf)

写真10『カレントアウェアネス』1号 1979年8月 <請求記号 Z21-1007> 関西館での発行は2002年から。(同誌最新号とバックナンバーの一部は、ホームページで閲覧可能。http://current.ndl.go.jp/ca)

写真11『レファレンス協同データベース事業データ作成・公開に関するガイドライン』国立国会図書館関西館事業部編・刊 2006 <請求記号 UL731-H18>



もう一つの関西館の大きな事業である電子図書館事業では、国立国会図書館所蔵資料のデジタル化を行っています。「国立国会図書館デジタル化資料」として提供している資料は、古典籍、和図書、和雑誌、官報、博士論文を合わせると、約220万点にのぼり、うち約41万点をインターネット公開しています(平成24(2012)年8月現在)。また、平成22(2010)年4月からは、公的機関が発信するインターネット資料の収集保存を開始したほか、平成23(2011)年5月からは、歴史的音

盤アーカイブ推進協議会 (HiRAC) がデジタル化した「歴史的音源」の公開を開始しました(写真12)¹⁷。このほか、インターネット上で提供されるデータベースのナビゲーションも行っていきます。

また、第Ⅱ部では、関西館のコレクションとして、以下の資料群のなかから特徴的なものをご紹介します。

- 外国の雑誌
- アジア諸言語の図書、雑誌、新聞
- 文部科学省科学研究費補助金による研究成果報告書(科研費報告書)
- 国内博士論文

関西館では、これらのコレクションをもとに、インターネットを通じた複写などの遠隔サービス、図書館間貸出しに対応しており、また、アジア地域におけるレファレンス・サービス、アジア情報に関する図書館員向け研修なども行っていきます。

次の10年に向けて

近年の情報通信技術の急速な発達により、国立国会図書館に求められる役割も大きく変化しています。国立国会図書館は、「国立国会図書館デジタル化資料」の一部の資料についてインターネット公開を進めているほか、平成22(2010)年か



写真12 国立国会図書館デジタル化資料 (<http://dl.ndl.go.jp/>)

らは国等のインターネット資料の収集を開始しました。

また、平成23(2011)年3月11日に発生した東日本大震災を受け、資料保存の重要性が見直されるとともに、東日本大震災アーカイブを構築し、記録を後世に残していく取組も始められています。関西館では、震災に関する電子情報の収集を進め、被災状況、関連する支援活動、支援組織、震災の記録や経験を残す活動に関する資料情報を調査して、東日本大震災の図書館に対する影響と復興支援の取組に関する調査報告書をまとめました(写真14)。

以上、「関西発・知られざる図書館のあゆみ」と題し、関西の図書館100年のあゆみと、関西館のこれまでの取組とを振り返ってきました。関西では、明治から平成までそれぞれの時代ごとに、



写真13
『国立国会図書館資料デジタル化の手引』2011年版 国立国会図書館関西館電子図書館課編・刊 2011<請求記号 UL755-J20>ホームページで閲覧可能。<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/pdf/digitalguide2011.pdf>

東京における図書館事業の展開を強く意識しながら、それを補完する形で、研究と実践が重ねられてきた歴史がありました。その意味では、我が国の図書館は、東西それぞれの地域の独自性を発揮することで、有機的に発展してきたといえます。

これからの10年に向けて、関西館では、紙媒体の資料の保存だけでなく、電子情報の収集・保存についてもさらに積極的に取り組んでいく必要があります。新たに大量に生み出される多様な電子情報を収集・保存し、効果的に提供していくための仕組みを実現していくことは当然ですが、そのためには、同時に、関西館の存在と役割について、より多くの方に知っていただくことが必要不可欠です。今回の展示を通じて、一人でも多くの方に関西館について関心を持っていただければと思います。

(関西館10周年記念行事担当)

17 歴史的音源とは、1900年初頭から1950年頃に国内で製造されたSP盤および金属原盤等に収録された音楽・演説等の音源を指す。



写真14
『東日本大震災と図書館』（調査研究レポートNo.13）国立国会図書館関西館図書館協力課編・刊 2012<請求記号 UL244-J96>ホームページで閲覧可能。<http://current.ndl.go.jp/report/no13>



写真15
『アジア情報室通報』第1号 国立国会図書館関西館アジア情報課編 国立国会図書館刊 2003<請求記号 Z71-J686>ホームページで閲覧可能。<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/asia-pub.php>

本展示会の詳細、概要については、国立国会図書館ホームページにも掲載しています。あわせてご覧ください。

URL http://www.ndl.go.jp/jp/event/exhibitions/1195752_1376.html

国立国会図書館ホームページ>イベント・展示会情報>関西の図書館100年、関西館の10年

○開催期間 平成24年10月1日（月）～31日（水）
（日曜日、国民の祝日・休日、第3水曜日を除く）

○開催時間 10:00～18:00

○会場 国立国会図書館関西館 大会議室
（京都府相楽郡精華町精華台8-1-3）

国立国会図書館の研修で、 あなたの技術と知識を磨いてみませんか？

●はじめに

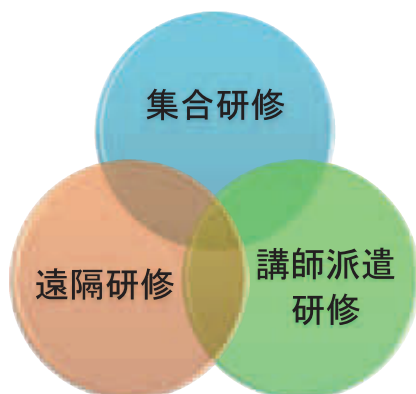
刻々と変化する社会の中で、日々成長を続ける図書館。そこで働く図書館員のみなさんは、利用者により良いサービスを提供するために、「もっと学びたい!」「もっと腕を磨きたい!」と、心の中で常に成長の機会を探していませんか？

毎日の業務から学ぶことも多いのですが、時には集中して、時には職場を離れて「研修」に専念することは、自分自身が大きく成長するチャンスでもあります。「忙しい」「時間が無い」と自分に言い訳してしまう前に、PCのWebブラウザで、このURLを開いてみてください。

<http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/index.html>

国立国会図書館ホームページ
>図書館員の方へ>図書館員の研修

[平成24年度の研修]と書いてあるリンクをクリックすると、今年度国立国会図書館が行う「図書館員向け研修」の一覧が出てきます。



●研修のスタイル

国立国会図書館のおもな図書館員向け研修は、実施スタイルごとに次の3種類に分かれています。

- ① 国立国会図書館の職員を講師として呼ぶことができる「講師派遣研修」
- ② 国立国会図書館（東京本館、関西館、国際子ども図書館）に直接行って研修を受ける「集合研修」
- ③ PCとインターネットを使って、いつでもどこでも研修を受けられる「遠隔研修」

科目や内容によって多少の差はありますが、いずれの研修も好評を得ており、募集開始後すぐに定員が埋まってしまう科目もあります。

●研修科目

国立国会図書館は、日本で最大規模の図書館です。国内の刊行物を中心に、扱う資料は3,000万点以上。資料の収集・整理から始まり、閲覧・複製・レファレンスサービスといった基本的な図書館業務、資料保存、古典籍、法令・議会・官庁資料、科学技術情報の提供など専門性の高いサービス、さらにインターネット上の各種情報サービス、資料のデジタル化と電子図書館サービスまで、質・量・テーマのいずれに関しても幅広い業務とサービスを行っています。こうした環境の下で、さまざまな経験とノウハウが日々蓄積されています。国立国会図書館では、この蓄積を知識に変えて、

研修という場で提供しています。

例として、平成24年度の研修科目を見てみましょう（既に終了した科目もあります。また、研修の科目は年度毎に変わりますので、最新の情報は国立国会図書館ホームページの「図書館員の研修」ページをご覧ください）。



<①講師派遣研修>

講師派遣研修は、研修会場と日時を指定していただき、そこに国立国会図書館の職員が伺って研修を行います。講師の旅費をご負担いただく必要がありますが、各図書館の研修計画や規模、事情にあわせて開催できるという利点があります。毎年3月前後に派遣先を募集しますが、それ以外の時期でも申込みを受け付けています。

講師派遣研修では、次の科目を設定しています。

○国立国会図書館のサービスやデータベースに関する研修

- (1) 国立国会図書館の図書館向けサービス「複写」「貸出し」「レファレンス」の申込み方
- (2) インターネットので使えるレファレンスツール
- (3) レファレンス協同データベース事業の紹介

○専門分野に関する研修

- (4) 経済産業情報の調べ方（図書館によるビジネス支援）—ツール紹介編
- (5) 経済産業情報の調べ方（図書館によるビジネス支援）—演習編
- (6) 科学技術情報の調べ方
- (7) 法令・議会・官庁情報の調べ方
- (8) アジア関係資料の調べ方（中国）
- (9) アジア関係資料の調べ方（韓国）

○国立国会図書館の業務紹介

- (10) 国立国会図書館のレファレンス業務の紹介
- (11) 国立国会図書館の展示業務の紹介

一部の科目については、研修資料のサンプルを国立国会図書館ホームページに掲載しています。また、可能な範囲でご要望にお応えしていますので、「こんな研修ができないかな？」といったご希望があれば、お気軽にご相談ください。

<②集合研修>

集合研修は、おもに国立国会図書館の各館を会場として行います。遠方の方にとっては負担が大きいです点もありますが、国立国会図書館の職員だけでなく著名な先生や専門家の講義を聞く事がで



きる、ワークショップやフロアディスカッションなど実践的な体験ができる、他の図書館の方と交流できるといった多くのメリットが得られるところに特徴があります。

集合研修では、次の科目を設定しています。

○図書館員を対象とする研修（一部条件あり）

- (1) 音楽資料・情報担当者セミナー
- (2) 科学技術情報研修
- (3) 資料デジタル化研修（実践編）
- (4) 資料保存研修
- (5) レファレンス研修
- (6) アジア情報研修
- (7) 児童文学連続講座-当館所蔵資料を使って
- (8) 障害者サービス担当職員向け講座
- (9) 法令・議会・官庁資料研修
- (10) 日本古典籍講習会

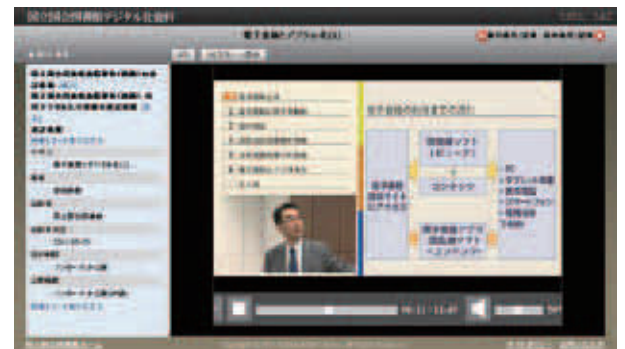
○特定事業の担当者等を対象とする研修

- (11) レファレンス協同データベース事業担当者研修会（レファレンス協同データベース事業参加館の実務担当者が対象）
- (12) 国立国会図書館総合目録ネットワーク研修会（研修講師向け）（都道府県立図書館および政令指定都市立図書館中央館における国立国会図書館総合目録ネットワークの実務担当者が対象）
- (13) 都道府県及び政令指定都市議会事務局図書室職員等を対象とする研修（都道府県及び政令指定都市議会事務局図書室または調査業務の実務担当者が対象）

研修によって、開催される会場（東京本館、関西館、国際子ども図書館、または他の機関）と募集期間が異なります。さらに年度毎に開催内容が変わるので、申込みの前には必ず「図書館員の研修」のページで詳細をご確認ください。



遠隔研修の画面例



<③遠隔研修>

時間と場所を問わず、自分の都合と理解度にあわせて研修を受けられるのが、e-Learning すなわち遠隔研修です。PCとインターネットがあれば、いつでも、どこからでも受講できます。また、大勢の方に受講していただけるのが強みです。

遠隔研修では、次の科目を設定しています。

○定員がある科目

- (1) 資料保存の基本的な考え方*
- (2) 経済産業情報の調べ方
- (3) 図書館と著作権

* (1) は、博物館・美術館・文書館の職員も参加可能。

○一般公開科目

- (4) 和書のさまざま
- (5) 資料デジタル化の基礎

平成24年度は、定員がある3科目を前期（平成24年6月1日（金）～10月1日（月））と後期（平成24年11月1日（木）～平成25年2月28日（木））

の2回実施します（前期の定員は700名）。後期の募集期間にはまだ間に合いますので、奮ってご応募ください。なお、2つの一般公開科目は、申込不要でいつでも見ることができます。

●その他の研修

ここまで挙げた研修は、いずれも「図書館員の研修」ページで詳細を確認できますが、それ以外にもいくつかの研修を行っています。

○レファレンス協同データベースの「研修環境」を使った研修

レファレンス協同データベース（<http://crd.ndl.go.jp/>）と同様の動きをするWeb環境を使って、レファレンス情報の入力や活用を体験してもらうものです。図書館の他、大学の講義や演習、学校の授業などで先生方にも活用されています（利用のためにはレファレンス協同データベース事務局へのアカウント申請が必要です）。

○図書館情報学実習生の受入れ

大学で図書館学を学んでいる学生を対象に、6日から10日程度、国立国会図書館（東京本館、関西館、国際子ども図書館）で、職員による実習指導を中心とした研修を行っています。

○海外の日本研究司書等に対する研修

国立国会図書館は、日本研究の支援、研究者の育成、人的交流を目的とした研修も行ってきました。最近では、平成22年度から3年間の計画で、国際文化会館と共に、海外在住の日本研究司書と若手日本研究者を対象とする研修交流事業「日本

専門家ワークショップ」を実施しています。最終年度の平成24年度は、過去の成果をもとに日本研究支援の今後のあり方の検討とシンポジウムを開催する予定です。

●今後の研修事業

講師派遣研修は、平成20年度から始まり、毎年30前後の機関に講師を派遣しています。徐々に研修メニューを増やしており、平成23年度は22機関で延べ701人の方が参加しました（当館のサービスリニューアルのため、例年より数が少なくなっています）。また、集合研修は年を追うごとに科目が増えており、平成23年度は延べ345人の方が研修に参加しました。遠隔研修も同様で、平成18年度に開始して以来、講座数と定員を増やしてきた結果、平成23年度は5講座で延べ960人の方が受講しました。研修のスタイルを問わず、研修終了後のアンケートの結果を総合すると、90%以上の方から「満足した」という回答をいただいています。

しかし、もっと定員を増やしてほしいという要望への対応や、古くなった遠隔研修科目のメンテナンス、遠隔研修+集合研修のような複数の研修を組み合わせることで学習効果を高めるブレンディッドラーニングの促進、さらなる満足度の向上など、改善すべき点はまだまだたくさんあります。ひとりでも多くの方のニーズに応え、「研修を受けて良かった！」と言っていただけるように、引き続きたゆまぬ努力を続けていきたいと思っています。

みなさんも国立国会図書館の研修を活用して、技術と知識を存分に磨いてください！

（関西館図書館協力課）

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。ここでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

多摩・商店ことはじめ

商店の歴史と多摩ニュータウン
パルテノン多摩歴史ミュージアム特別展

パルテノン多摩 編・刊

2011.5 93頁 30cm

<請求記号 DH468-J477>

街歩きの醍醐味は、景観の中に残された痕跡を手掛かりに過去に思いを馳せることにある。都心部であれ、郊外であれ、街を歩けば道々、さまざまな遺物が残っているものである。しかし、大規模かつ集中的に開発されたニュータウンの場合、その古層を探ることは難しい。多摩ニュータウンの都市計画は、台地と谷地という地形レベルの制約を除けば、白紙に自在に描かれたもののように感じられる。

本書は、市制40周年（多摩ニュータウン入居開始からも40年）を記念して、2011年3月26日から5月22日まで多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）が開催した特別展の図録である。サブタイトルにあるとおり、商店に視座を据えて多摩地域の歴史が記述される。

商店から地域の歴史を展覧する意義は、「はじめに」の簡潔な説明に尽くされている。「村のウチとソトをつなぐ中継点」、「その時の先進的な交通手段を用いて必要なものを地域にもたらす存在」、さらには「住民同士のコミュニケーションの場」であった商店は、自足的な農村共同体において外部との商品交換を一手に担っていた。モデルとした英国流の田園都市に相違し、ニュータウンは決して職住近接のコミュニティとはならなかったため、在来の商店や在地の農家が団地の一角に設けられた近隣センターへ入居するなどして、「ベッドタウン」の生活を支えた。

本書は、明治・大正から現在に至る多摩地域の商店の変遷を、個々の商店に着目して追跡している。ミクロな事象の積み上げで、地域社会の変容を巧みに物語っている。4章立ての第1、2章では、ニュー

タウン建設以前を、商家に残された商売道具や古写真、関係者の聞き書きなどから振り返る。特筆すべきは写真で、人びとの出で立ちや店舗の変遷を追えるのが楽しい。昭和初年、揃いの半纏姿で店の前に並んで写った人びとは、その後どうなったのだろうか。後半第3、4章では、ニュータウン建設から現在に至る時期が描かれる。開発の当初は、都市計画に伴う移転や「生活再建」(在地農家に対する転業の斡旋)など、必ずしも幸福なスタートではなかったが、商店会の奮闘もあり次第に近隣センターは軌道に乗ってゆく。しかし、やがて90年代を迎えると、少子化や規制緩和の大きなうねりは、否応なく商店を呑みこんでゆく。

ニュータウンにも歴史あり。地域に生きる商店こそが、街の記憶の保管庫だったのだ。なお、素晴らしいのは巻末の「関連年表」で、一例を挙げると、昭和28年頃の項に「榮昌堂がテレビを購入」とあるが、この榮昌堂という饅頭屋、昭和36、7年頃には閉店しているのである。このような調子で証言・事実が並んでいるが、これらを発掘した学芸員の努力たるや。労作というほかない。

(総務部支部図書館・協力課 おもり けんご 大森 健吾)



東日本大震災により 被災した古文書の 修復を開始

国立国会図書館は、東日本大震災復興支援活動の一環として、この10月から平成26年9月までの2年間の予定で、被災した岩手県指定有形文化財「吉田家文書」の本格修復を行う。

吉田家文書は、仙台藩の^{おおききもいり}大肝入（租税事務などを担当する役人）を世襲していた吉田家に伝わる文書類である。江戸時代から明治時代にかけての執務記録である「^{じょうどめ}定留」等がまとまった形で含まれており、岩手県陸前高田市立図書館の特別書庫に収められていた。同館は東日本大震災の津波により全壊したが、吉田家文書の多くは流出を免れ、岩手県立博物館で応急処置が行われた。その後の状態調査に当館の職員が参加したところ、和紙の腐食等による損傷が判明したため、岩手県教育委員会からの依頼を受け、文書を東京本館に搬送して本格修復を行うこととした。

文書は2回に分けて搬送し、長期保存および学術資料として活用されることを目指して、カビの除去、損傷部分の補てん等を行っていく。10月1日に1回目の搬送分が到着し、修復作業を開始したところである。

修復作業の進捗状況については、ソーシャルネットワーキングサービス Facebook を通じて報告していく。

< <http://www.facebook.com/yoshidakeshufuku> >



韓国国立中央図書館 との第15回業務交流

9月4日～11日、国立国会図書館において標記の業務交流が行われ、韓国国立中央図書館からオ・ヘヨン（呉惠永）資料管理部国家書誌課長を団長に、クァク・スヨン（郭修英）資料管理部資料運営課司書、キム・ソンミ（金仙美）資料管理部国家書誌課司書の計3名の代表団が来日した。

東京本館では3つのセッションが行われ、まず基調報告として両館のこの1年の取組、今後の課題と展望について報告し、質疑を行った。当館のNDLサーチで行っている書誌データの提供、電子情報部設置の背景および所掌事務、資料のデジタル化等や、韓国の国家書誌課の新設を伴う組織改編、新たに建設予定の世宗（セジョン）図書館の機能等について情報交換を行った。

「書誌に関する国立図書館の活動と今後の展開」をテーマとするセッションでは、韓国からは国立中央図書館の人名典拠コントロールの現況と課題について、当館からは書誌データ作成・提供の現況と今後の展開について報告し、活発な質疑を行った。さらに代表団は、収集書誌部収集・書誌調整課職員と懇談し、書誌データや典拠データの作成方法に関する相互の取組や課題について情報交換を行った。

「国内外の交流協力の現況と活性化の方策」をテーマとするセッションでは、韓国からは複数の図書館が協力しあってレファレンス回答を行う協力型オンライン知識情報サービス（CDRS）「司書に聞いてみましょう」の現況について、当館からは関西館図書館協力課で行っている図書館協力事業の概要について報告を行った。

その後、関西館に場所を移して、オンライン資料の収集、保存、提供や、レファレンスサービスに関わる懇談を行った。



関西館におけるセッションの様子

おもな人事

<異動>

※ () 内は前職

平成24年10月1日付け

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任

(専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付)

武田 美智代

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付

(主幹 調査及び立法考査局社会労働調査室付)

齋藤 純子

主幹 調査及び立法考査局付、国会分館長事務取扱

(調査及び立法考査局国会分館長)

本田 一治



お知らせ

■ 資料のデジタル化に伴い 原資料の利用を停止します

国立国会図書館では劣化した資料の保存と利用の両立を図るため、デジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。

このデジタル化作業のため、東京本館で一部の資料の利用を停止します。詳細については、国立国会図書館ホームページや館内掲示等で随時お知らせいたします。

利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、国民の文化的財産である国立国会図書館の蔵書を、可能な限り長く保存し後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

- 利用停止対象資料 戦前期に刊行された和図書の一部 約1,100冊
- ①請求記号が300～799で始まるもの（旧函架）
 - ②カタカナのア～ンで始まるもの（講義録）
 - ③特8～72で始まるもの（明治期乙部図書）等

- 利用停止期間 平成24年11月から平成25年3月まで（予定）

※ご来館の際は、NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）で、ご希望の資料が利用可能かどうかを、事前にご確認ください。

URL <http://ndlopac.ndl.go.jp/>

お知らせ

■ 第14回図書館総合展に参加します



昨年の展示ブース

図書館に関する国内最大の展示会である、第14回図書館総合展に参加します。展示ブースでは、国立国会図書館のサービスをご紹介します。また、ポスターセッションでは、カレントアウェアネス・ポータル、レファレンス協同データベース事業、研修事業、国際子ども図書館を取り上げます。

期間中に、国立国会図書館関西館開館10周年記念行事として、関西館の事業に関するフォーラム（講演会）を開催します。ぜひご来場ください。

- 日 時 11月20日（火）、21日（水） 15:30～17:00
- 会 場 パシフィコ横浜 アネックスホール
20日 第5会場（F205）
21日 第3会場（F203）（両日とも定員200名）
- 演 題 20日 「電子図書館サービスの現在と図書館のこれから」（仮題）
21日 「高めよう、広げよう、情報専門職のコア技能！
～国立国会図書館の研修 徹底活用!!～」（仮題）
- 講 師 20日 富田倫生 氏（青空文庫）
入江伸 氏（慶應義塾大学メディアセンター本部課長）
渡邊齊志（国立国会図書館関西館電子図書館課）
21日 小田光宏 氏（青山学院大学教育人間科学部教授）
兼松芳之（国立国会図書館関西館図書館協力課）

○お申込方法

ホームページの参加申込みフォームからお申し込みください。

国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>イベント・展示会情報
URL <http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/lff2012.html>

または次の事項を明記の上、FAXでお申し込みください。

- ①イベント名（図書館総合展フォーラム）、②参加希望日、③氏名（ふりがな）、
④電話番号・FAX番号、⑤所属（図書館などに所属されている方のみ）

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 総務部 総務課 広報係

FAX 03 (3597) 5617 電話 03 (3581) 2331（代表）

第14回図書館総合展（主催 図書館総合展運営委員会）

期間 11月20日（火）～11月22日（木） 10:00～18:00

会場 パシフィコ横浜 展示ホールD

お知らせ

■ 平成24年度企画展示 「日本と西洋 —イメージの交差—」



国立国会図書館では、日本に関する西洋の資料を多く収集しています。本展示会では、それらの資料を中心に、16世紀のキリスト教の伝来から20世紀初頭までの、日本と西洋の接触から生まれた様々なイメージを紹介します。

日本の風習に驚きながらも馴染もうとした宣教師。鎖国の時代、少ない情報と幕府の取り締まりの中、必死に学んだ蘭学者たち。開国後、万国博覧会で評判になりジャポニズムに結実した日本美術。こうした接触の中、西洋人が「発見」した日本人の美德と欠点は現代にも通じるものがあります。

一方で、日本は「さかさま」の国、西洋人にはかかとがない、といった奇異なイメージも双方に流布していました。現代でも、外国人が着ているTシャツにプリントされた不思議な日本語に思わず微笑んでしまうことがあります。遠くの地への憧れと誤解は、避けられないものなのでしょう。こうした異文化受容とその葛藤の足跡を、シーボルト直筆等の貴重書とともにご紹介します。

- | | |
|-------|--|
| ○開催期間 | 平成24年11月5日（月）～12月8日（土）
（日曜・祝日、11月21日（水）を除く） |
| ○開催時間 | 10:00～19:00（土曜は18:00まで） |
| ○会場 | 東京本館 新館1階展示室 |
| ○入場 | 無料 |

○ギャラリートークのご案内

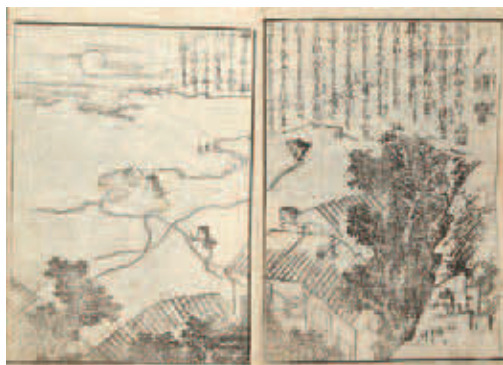
当館職員が見どころや裏話をお話します（各回30分程度）。

日時 11月10日（土）、20日（火）、12月1日（土） いずれも14:00～

○お問い合わせ先

国立国会図書館 利用者サービス部 サービス企画課 展示企画係

電話 03（3506）5260（直通） 電子メール tenji-kikaku@ndl.go.jp



日本人が想像した世界各国を紹介した本『絵本異国一覽』から、北アメリカに住む「戸頭蛮^{しとうばん}」というろくろ首。
<請求記号 127-255>



オランダ商館員フィッセルが日本での見聞をまとめた『日本風俗備考』の冒頭、日本の始祖夫婦の像。
<請求記号 蘭-661>



パリの浮世絵師リヴィエールが北斎の『富嶽三十六景』を模倣してパリの風景を描いた『エッフェル塔三十六景』
<請求記号 KC314-B21>

お知らせ

■ 関西館小展示

(第12回)

「時空をかける三国志」



「西班牙藏葉逢春刊本三国志史傳」
國家圖書館出版社 2009.8
<請求記号 KK222-C22>



「絵本通俗三国志」
上海書店出版社 2003.4
<請求記号 KG239-C3>



「[絵本] 三国志」
奥田忠兵衛 1887.3
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/883794>

第12回の関西館小展示では、「時空をかける三国志—日本・中国における三国志演義の展開」と題して、関西館で所蔵する国内刊行資料やアジア言語資料から三国志演義に関する資料を紹介します。

約1800年前の魏・蜀・呉の三国の興亡を題材として中国で成立した三国志演義は、その後アジア各国に伝わり、日本でも長く読み継がれています。平成24(2012)年は日中国交正常化40年にあたることから、日中両国を中心とする三国志演義の形成と受容の歴史を示す資料約90点を展示します。

- 開催期間 10月18日(木)～11月20日(火)(日曜・祝日を除く※)
- ※11月18日(日)は関西館見学デーのため10時から16時まで開催
- 開催時間 10:00～18:00
- 会場 関西館 総合閲覧室
- 入場 無料

○関連講演会のご案内

10月27日(土)に、関連イベントとして、京都大学人文科学研究所の金文京教授による講演会を開催します。「東アジアの三国志演義」と題して、現代の中国や日本などアジア各国における三国志演義についてお話しいたします。

- 題目 「東アジアの三国志演義」
- 講師 金文京氏(京都大学人文科学研究所教授)
- 日時 10月27日(土) 14:00～16:00
※講演終了後、小展示の見学会があります。
- 会場 関西館 第一研修室
- 定員 70名(定員に達し次第受付を終了)
- 入場 無料
- お申込方法 ①件名「東アジアの三国志演義」申込み ②氏名、③電話番号(日中のご連絡先)、④FAX番号(FAXでお申込みの場合のみ)を明記の上、お申し込みください。
電子メール k-tenji@ndl.go.jp FAX 0774(94)9115
- お問い合わせ 国立国会図書館 関西館 総務課 総務係
電話 0774(98)1224(直通)



お知らせ

■ 国際子ども図書館講演会 「中国の子どもの読書— 作家・彭懿氏が語る現在」

中国の著名な児童文学者であり、また日本の児童文学作品を多数中国に紹介している翻訳家でもある彭懿氏をお招きして、中国の児童書事情についての講演会を開催します。入場は無料です。

- 日 時 12月1日（土）13:30～
- 会 場 国際子ども図書館ホール（3階）
- 講 師 彭懿氏（児童文学作家、児童文学研究者、浙江師範大学児童文化研究院副研究員）
- 通 訳 周龍梅氏（児童文学研究者、翻訳家）
- 対 象 中学生以上（定員100名）

○お申込方法

次のいずれかの方法で、参加者1名につき1通に氏名（ふりがな）、年齢、郵便番号、住所、電話番号をご記入の上、11月16日（金）までにお申し込みください。申込多数の場合は抽選となります。

[往復はがき] 〒110-0007 台東区上野公園12-49「12月1日講演会」係
(返信用はがきに返信先の郵便番号、住所、氏名をお書きください)

[電子メール] koen1201@kodomo.go.jp
(タイトル・件名欄に「12月1日講演会申込み」とお書きください)

○お問い合わせ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課
電話 03 (3827) 2053 (代表)



お知らせ

■ 東京本館 「利用ガイダンス」

東京本館では、初めて国立国会図書館を利用する方向けに基本的な使い方を紹介する「利用ガイダンス」(約40分)を開催しています。参加は無料です。
どうぞお気軽にご参加ください。

- 開催内容 国立国会図書館の概要 (5分)
利用者端末の概要と資料の閲覧・複写方法 (25分)
東京本館の館内ガイド (10分)
- 開催日時 毎月第2、第4木曜日 14:00～
- 参加方法 開催当日に、本館・新館の各インフォメーションでお申し込みください。
- 定員 各回5名程度(先着順)
- お問い合わせ先
国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 総合案内係
電話 03(3581)2331(代表)

※最新の日程はホームページに掲載しています。

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 東京本館
> 東京本館のイベント・展示会情報 > 東京本館の利用ガイダンス

URL http://www.ndl.go.jp/jp/service/tokyo/events/tokyo_guidance.html



お知らせ

■ 平成24年度 障害者サービス 担当職員向け講座

障害者サービスに関わる図書館職員等に対し、基礎的な知識および技術を習得することを目的として、平成24年度障害者サービス担当職員向け講座を実施します。

○開催日 12月3日（月）～5日（水） また、次のいずれか1日に外部機関
で実習を行います。 *実習日については、応募の際にご希望をお知らせください。

12月6日（木） 大阪府立中央図書館、豊中市立岡町図書館、
岸和田市立中央図書館、日本ライトハウス、
京都ライトハウス

12月10日（月） 大阪市立中央図書館

○会場 関西館 第1研修室

○対象 公共図書館職員、大学図書館職員。定員に余裕のある場合は、類縁
機関（視覚障害者情報提供施設等）の職員等の参加も可能です。

○定員 20名。応募者多数の場合は調整します。

○内容 障害者サービスに関わる図書館職員等が必要な基礎知識と実際の
サービス事例（視覚障害者、聴覚障害者）についての講義、受講者
も交えた障害者向け資料の製作・扱い方に関する意見交換、障害者
サービス実施に関する意見交換、障害者サービスを行っている図書
館等での実習。

○参加費 無料。ただし、旅費・滞在費等は受講者の負担とします。

○お申込方法

ホームページに掲載している申込書にご記入の上、電子メール、FAXまたは
郵送で11月2日（金）までにお申し込みください（必着）。

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 関西館 図書館協力課 障害者図書館協力係

電子メール syo-ky@ndl.go.jp FAX 0774 (94) 9117

〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3

電話 0774 (98) 1457 (直通)

※研修内容の詳細および申込書はホームページをご覧ください。

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>図書館員の方へ>視覚障害者等への図書館サービス>障害者サービス担当職
員向け講座

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/library/supportvisual/supportvisual-kouza.html>

お知らせ

■ 総合調査報告書 『技術と文化による日本の再生』を刊行しました



調査及び立法考査局は、このたび総合調査報告書『技術と文化による日本の再生』を刊行しました。この報告書は、平成23年度から1年半をかけて行ってきた調査プロジェクトの成果を取りまとめたものです。

バブル崩壊後20年余りの停滞に加え、東日本大震災の深刻な影響も受け、日本経済はますます厳しい状況に直面しています。この調査プロジェクトでは、日本の今後の成長に必要な方策について、インフラ、コンテンツ分野の海外展開への取組および課題等を中心に考察しました。あわせて、参考となる各国の事例についても紹介しています。

この報告書は、調査論文を掲載した報告書本編と、国内外の専門家を招いて開催した国際政策セミナー「世界経済の動向と日本の成長戦略—東日本大震災後の課題—」（平成24年1月27日開催）の講演記録「国際政策セミナー報告書」の2分冊から構成されています。

日本の成長戦略を考える上でご参考になれば幸いです。

※ 刊行された報告書の全文をホームページでご覧になれます。

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

> 国会関連情報 > 『調査資料』 > 2012年刊行分

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/document/2012/index.html>

お知らせ

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第253号 A4 172頁

季刊 1,890円 発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-738-2)

<主要立法(翻訳・解説)>

- ・EUの新しい食品表示規則
- ・フランスにおける最低所得保障制度改革—活動的連帯所得手当RSAの概要
- ・ドイツにおけるボランティアを助成するための法律
- ・スウェーデンにおける個人情報の取扱いと保護に関する沿岸警備隊情報法
- ・韓国における難民法の制定
- ・フィリピンの幼稚園教育法—基礎教育の制度化



レファレンス 740号 A4 79頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・地方分権の指導理念としての「補完性の原理」
- ・男女賃金格差是正のための取組み
- ・ニュージーランドの議会制度



カレントアウェアネス 313号 A4 28頁 季刊 420円 発売 日本図書館協会

- ・関西館の10年：構想段階と現況とを対比して
- ・大学図書館のサービスとしての文献管理ツール
- ・数字で見るイラン児童書の昨今の出版状況

<動向レビュー>

- ・利用者要求にもとづくコレクション構築：大学図書館における電子書籍を対象としたPDAを中心に

<研究文献レビュー>

- ・電子書籍

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Genshibukkyō no jissen tetsugaku
 Doctoral dissertation by Tetsuro Watsuji, from the collections of the Kansai-kan
- 04 Focus: Kansai-kan of the National Diet Library
- 05 Marking the 10th Anniversary of the Kansai-kan
- 16 “100 years of libraries in the Kansai Region and 10 years of the Kansai-kan”:
 Exhibition at the Kansai-kan commemorating the 10th anniversary
 Things you didn’t know about the footsteps of the libraries in the Kansai Region
- 24 Let’s practice your technique and knowledge in training programs of the NDL!
- 15 <Tidbits of information on NDL>
 A small library inside a big library: Asian Resources Room
- 28 <Books not commercially available>
 ○ *Tama shōten kotohajime : shōten no rekishi to Tama nyūtaun : Parutenon Tama Rekishi Myūjiamu tokubetsuten*
- 29 <NDL News>
 ○ Conservation work started on old local documents damaged by the Great East Japan Earthquake
 ○ 15th mutual visit program with the National Library of Korea
 ○ Changes in personnel
- 32 <Announcements>
 ○ Discontinuance of reader service of original materials because of digitization
 ○ Library Fair & Forum 2012
 ○ Exhibition “Japan and the West — Intersection of Images”
 ○ Small exhibition in the Kansai-kan (12) “Romance of the Three Kingdoms, transcending cultures and centuries”
 ○ Lecture at the International Library of Children’s Literature “Current status of children’s reading activities in China: told by Mr. Peng Yi”
 ○ Tour: how to use the Tokyo Main Library
 ○ Training program for librarians in charge of services for persons with disabilities 2012
 ○ Research Material *Regeneration of Japan through Technology and Culture* published
 ○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成24年10月号 (No.619)

発行所 国立国会図書館
 編集責任者 田中久徳
 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
 電話 03 (3581) 2331 (代表)
 F A X 03 (3597) 5617
 E-mail geppo@ndl.go.jp

平成24年10月20日発行 定価525円
 (本体500円)

発売 社団法人日本図書館協会
 〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
 電話 03 (3523) 0812 (販売)
 F A X 03 (3523) 0842
 E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



「諸國名處百景 京都東福寺通天橋」
歌川広重(2世)画 魚屋栄吉 安政6(1859) ちりめん絵
1枚 21.8×15.0cm
〔『諸国名所百景』＜請求記号 寄別7-9-2-3＞所収〕

国立国会図書館月報

平成24年10月20日発行 (毎月1回20日発行)
(10月号通巻619号)

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525 円 (本体 500 円)